

【原著論文】

## 韓国における幼児期の環境教育の現状について

井上美智子\*・地下まゆみ\*

### 要旨

韓国の保育制度の歴史と幼児期の環境教育施策の歴史を整理し、2019年改訂のヌリ課程において幼児期の環境教育がどのように取り入れられているかを確認した。その上で、韓国の清州市及び近隣地域の幼児教育施設と環境教育施設を実地見学し、保育実践の現状及び環境教育の導入実態について視察を行った。保育はコーナー保育とプロジェクト活動を中心に実践されており、ESDに取り組む園ではそれがプロジェクト活動の主題となって子どもの参画を進める優れた実践がなされていた。しかし、園庭には人間の管理下にある自然しかなく、環境教育にとって重要な生態系を日常的に学ぶ機会は少ないようで、韓国の幼児期の環境教育実践の課題と考えられた。

キーワード：環境教育 自然 保育 韓国

### 1 はじめに

21世紀以降、環境教育という概念を超えて、持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development=ESD）、持続可能性のための教育（Education for Sustainability=EfS）、環境と持続可能性のための教育（Environmental and Sustainability Education=ESE）など新たな冠を掲げる教育課題が登場している。そのいずれにおいても持続可能な社会の形成が21世紀の人類の大きな課題であることが共有されており、また、そのなかで幼児期の重要性が確認されている<sup>1),2),3)</sup>。

こうした潮流のなかで、国際的にはこれらの教育課題に向かう必要性を保育の国家指針に明記する国は北欧諸国やオーストラリアなど増加傾向にある。日韓豪の保育者を対象としたこれらの課題に関わる概念理解や保育実践の実態の比較結果によれば、韓国やオーストラリアに比べ、日本の保育者の概念理解や実践実態は環境教育の観点からみて遅れていることが報告されており、その背景に日本の保育に関わる国家ガイドラインにおいて環境教育やその近接概念に

---

\*大阪大谷大学教育学部

関する記述がないことがあると推察されている<sup>4)</sup>。

韓国はアジアの国のなかでは比較的早い段階から環境教育につながる教育を幼児期から実施すべきとして、国のガイドラインにも記載してきた国である。そこで本研究では、韓国がどのように環境教育を国のガイドラインに取り入れ、どのように普及に向けた取り組みをしてきたかを整理した上で、韓国の幼児教育施設における保育環境や活動内容について現地調査を実施し、保育環境を観察し実践内容を聞き取ることで、末端の現場において施策として導入されている環境教育がどのように具体化されようとしているのかを明らかにする。

## 2 韓国の保育制度の歴史

環境教育につながる内容が幼児期の国家指針にどのように位置づけられてきたかを把握するために、まず、韓国の保育史について概観する。韓国では、植民地統治の影響もあり保育制度の基本は日本と似て、3～5歳の幼児が対象の幼稚園と0～5歳の乳幼児が対象の保育所があり、幼保2元制が長らく残存してきた<sup>5), 6), 7)</sup>。1980年代以降、働く女性の増加に伴い保育のニーズが高まるとともに乳幼児保育が社会問題となり、1982年に「幼児教育振興法」が、1991年には「乳幼児保育法」が制定され、保育政策は従来の託児から保育へと発展した<sup>8)</sup>。

2004年「幼児教育振興法」が廃止され、5歳児の無償教育を盛り込んだ「幼児教育法」が制定されて様々な施策が実施され、「乳幼児保育法」も改正され、5歳児の教育と保育の無償化拡大方針が打ち出された<sup>9), 10)</sup>。韓国では日本以上に少子化が急速に進行しており（2021年合計特殊出生率は日本が1.3、韓国が0.8）<sup>11)</sup>、早くから少子化問題対策が検討されてきたことが以上のような保育政策改革の背景となったようである<sup>12), 13), 14)</sup>。改革では全国保育実態調査の実施なども定められ<sup>15)</sup>、2009年には「アイサラン（子ども愛）プラン」により保育に対する国家の責任を強化し、利用者中心の保育政策へと修正された<sup>16)</sup>。ただし、2010年において保育施設の89%が民間施設で、子どもの77.7%が在籍し、量的拡充の裏で質の低下が指摘され、営利的教育産業の参入が増え、保育の質の向上が課題となったようである<sup>17), 18)</sup>。

韓国の幼児教育課程として知られるヌリ課程は以上のような背景のもと2011年に告示され、幼稚園と保育所に二元化されていた内容が統合され、2012年には5歳の子どもは共通課程を学ぶことになった<sup>19), 20)</sup>。小学校の教育課程との強力な連携性を強調する一方で、子ども中心、かつ、遊びに基礎をおいて、5領域（身体運動と健康、意思疎通、社会関係、芸術、自然探究）を統合することに焦点を当てて編集されている。一方、就学前早期教育も韓国の一つの特徴といえ、私立幼稚園と保育所の80%以上が、英語や文字学習など平均3～4種類の特別活動を実施しているという<sup>21)</sup>。2013年には満0～5歳児の無償教育、養育手当で支援政策も導入され、2018年には「幼児教育発展基本計画」が制定され、幼児教育に対する国の責任強化と質

の高い幼児教育の提供が目標とされている<sup>22), 23)</sup>。2016年までに所得制限も廃止され、公立私立にかかわらず0歳からの無償化が実施されているものの、家庭の教育力の低下や私教育の拡大など課題も多いようである<sup>24), 25)</sup>。このような韓国の保育の歴史について、金ら(2015)は「韓国における保育政策は、イデオロギー(民主化、グローバル化、新自由主義、IMF危機)、各政権の公約及び政策、社会変化などの影響を大きく受け、頻繁な改訂や修正を行いながら発展してきた」とし、2014年に保育施設の園長20名対象に質問紙調査を実施し、園長らがヌリ課程や養成教育、資格基準の強化については賛成しているものの、頻繁に変わる保育政策や政府の強い規制と強度の監視に強い不満を持っていると報告している<sup>26)</sup>。

### 3 韓国の幼児期における環境教育施策

韓国は早くから幼児期の国家ガイドラインに環境教育につながる内容を取り入れてきた。まず、韓国の幼児教育の国家ガイドラインであり、教育課程であるヌリ課程の概要を概観する。2012年に5歳児対象のヌリ課程が施行され、翌2013年には3～5歳児対象ヌリ課程へと拡大され、2019年に改訂されている。2020年度から施行の改訂ヌリ課程の特徴は「幼児・遊び中心」の保育が強調され、「遊び」概念のとらえ直しを保育者に求め、そのための事例の読み取り例などが丁寧に解説されており<sup>27)</sup>、世界の幼児教育の潮流をふまえた保育者の教育観を変革させるような改革となっている<sup>28)</sup>。保育に関わるガイドラインとして幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針の3種を設置している日本と異なり、ヌリ課程は幼保二元体制をそのままに共通カリキュラムとして適用されており、杉本(2021)はこの共通カリキュラムの導入が政府の強力な指導の必要性につながったと説明している<sup>29)</sup>。呉地(2014)も保育施設と幼稚園の二元体制下で、「教育の機会均等の保障」と「質の高い教育課程」を目指して、すべての幼児に対して事実上の公教育化の実現を意味したとする<sup>30)</sup>。政府主導で導入された共通カリキュラムの理解を進めるために政府は幼児教育振興院を各所に設置し、そこで幼児に向けた体験教育プログラムや教員研修を実施している<sup>31)</sup>。

3歳未満児はヌリ課程の対象ではないが、標準保育課程のなかに教育課程が示され、6領域のうちの一つに「自然探求」がある。その目標には、身近な事物と自然環境について「基礎知識を積んで、自然を愛する心を持つ」とあり、ねらいとして身近な事物と自然環境を0～1歳では「感覚的に知覚して探索する」、2歳では「多様な方法で探索する」とあり、内容も0～1歳で「身近な生物に関心を持つ」、2歳で「身近な動植物の特性を知る」とあるという<sup>32)</sup>。日本の保育所保育指針と比較しても、ねらいはより具体的に記述され、3歳未満児においても自然を愛する心を持つことが求められている。

環境教育の観点については、まず、1990年代から幼児期の環境教育への関心が高まり、

2007年改訂の幼児教育課程で環境教育の重要性が指摘され、「人間と自然の両方を尊重する」ことが強調されたという。そこでは小学校以上の教育課程との連携も考慮されてクロスカリキュラム的テーマが提示され、そのうちの一つが環境教育であった。さらに、2008年には韓国政府が低炭素でグリーンな成長戦略を示し、「環境」と「経済」の両方に重点を置いた Green Growth Education (GGE) として、ヌリ課程にも反映されたという<sup>33)</sup>。新井ら (2019) は、ヌリ課程に追加された教育課題としてエコロジー教育があったとする<sup>34)</sup>。しかし、正確には教育課題としてあげられたのはエコロジー教育ではなく、GGE であった<sup>35)</sup>。韓国では Lee Myung-Bak 政権下 (2008-2013) で Green Growth があらゆる分野で推進されるようになったことから、教育においても GGE が取り上げられ、ヌリ課程への導入とは別に 2012 年に教育省が幼稚園の 3～5 歳児向け GGE 教材を開発し、2013 年に全国の公立・私立幼稚園に配布されたという。また、ヌリ課程の指導資料 11 冊 (3 歳児は 10 冊) のうち 1 冊が「環境と生活」に関するもので、そこに GGE が意識されたため、義務ではないが、保育者は取り入れようと努力するようになった (O., Ji 博士, 2015 年 3 月 21 日私信)。

しかし、Elliott ら (2020) のレビューによれば、その後、韓国では政治体制の変化により GGE よりも ESD という用語が一般的に使われるようになり、韓国政府も幼児教育における ESD への関心を高め、持続可能な開発 (SD) に向けた方向性を検討する観点から、環境教育に関する研究に資金を提供し、SD を目指したカリキュラムが検討され、ESD は韓国の教育において一般的な概念となっていったようである<sup>36)</sup>。また、2011 年以降は韓国 UNESCO が中心となって ESD 公式プロジェクト認証を通して ESD の拡大に努めており、ESD 関連の著作や研究も増えている。新井ら (2019) もヌリ課程改訂作業においては、ESD や世界市民教育、平和教育に関する内容の補強が検討されたとしている<sup>37)</sup>。ただし、Elliott ら (2020) は GGE や ESD などの複数の概念が明確化されていないこと、韓国を悩ませる高い PM2.5 などによる外遊び規制までもたらす大気汚染問題、ESD 実践に関する評価基準の欠如などを課題と指摘している<sup>38)</sup>。

以上のように改訂ヌリ課程においては GGE にかわり ESD が導入されたと読み取れるが、実際にどうであったのか、韓国においてプロジェクトアプローチ研究及び EIS 研究を主導してきた Ji 博士の見解を紹介する (O., Ji 博士, 2024 年 1 月 19 日私信)。Ji 博士によれば、GGE は 2012 年施行の 5 歳児対象ヌリ課程においてクロスカリキュラム的テーマの一つとしてあげられたが、2013 年施行の 3～5 歳児対象ヌリ課程にはクロスカリキュラム的テーマ自体が記載されなくなった。そして、2019 年改訂ヌリ課程でも ESD は言葉としては記載されていない。ただし、小学校以上の教育課程には環境教育と ESD がクロスカリキュラム的テーマとしてあげられているため、幼小連携の観点から関連教材の開発が盛んになっており、保育者の関心が高まっている上に、園長資格研修や教員資格研修等に ESD に関する研修が入ることが一般的と

なり、韓国 UNESCO や幼児教育関連団体が積極的に ESD を推進する取り組みを進め、教育省も 2019 年改訂ヌリ課程の支援資料として幼児期の気候変動教育に関する教材や教師向け資料を WEB サイトに掲載したり、幼児期の ESD に関する教員研修動画を公開したりしているという。実際、ヌリ課程の解説書には 2019 年改訂の趣旨として、未来社会をふまえて「自然や生命を尊重し、他の人と共に生きる正しい人格を備え、創造的な思考で持続可能な社会を作ることができる能力を備えた人が必要である」(AI 翻訳による)と記載されている。また、求める人間像を提示し、その一つが「共に生きる人」であり、その説明文には「他者と生命を尊重し、自然と共に生き、より良い社会を作るために社会問題に関心を持ち、協力する民主的の市民」とある。また、5 領域の一つ「自然探求」は「探求過程を楽しむ」「生活のなかで探求する」「自然と共に生きる」という 3 つの内容から成り立ち、それに対して解説書は、「自然と共に生きる」という内容は、幼児が生命と自然環境の大切さを体験する内容として新たに編成したものとし、旧ヌリ課程で社会関係領域にあった「自然と資源を大切にすることを養う」と自然探求領域にあった「生命と自然環境を知る」と「自然現象を知る」を統合し、持続可能な社会のための生活態度を形成する内容として再構成したとする。具体的な内容として、「幼児が動植物だけでなく、動植物が生きやすい環境に関心を持ち、これらを生命体として大切にすると説明し、ミツバチをテーマにしたプロジェクト活動を紹介している<sup>39)</sup>。

以上を日本のガイドラインと比較してみると、日本でも 2017 年改訂の幼稚園教育要領の前文に「持続可能な社会の創り手」という文言が入ったものの、それ以外のねらいや内容部分にそれは反映されておらず、解説書にもその反映が読み取れる記載は一切ない。保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領には前文自体がないため、持続可能性についての記載すらなく、日本の幼児教育のガイドラインには環境教育や ESD、EFS につながる記載は現時点においてない。しかし、韓国では「持続可能な社会を作る」という文言が改訂趣旨に示されただけでなく、領域の内容に具体化され、解説書にも記述されている。このようにみると、韓国では幼児期のナショナルカリキュラムに環境教育に該当する内容が引き続き取り入れられていると判断でき、教育省や関連団体の動きを見てもヌリ課程を基礎に幼児期の ESD 推進を支援する動きとなっているようである。また、同じ 5 領域という構成でありながら、日本の保育は「環境」と名づけられた領域のなかに自然と関わるねらいと内容を含めているが、韓国のヌリ課程では「自然探求」という領域が設置されている。いずれも領域は総合的に扱われるべきとされていることは共通しているが、内容としてみると、日本の保育では自然は子どもを取り巻く環境のなかの 1 要素という扱いになるが、韓国の保育では自然に焦点を当てた領域が独立しているため、子どもが探究すべき対象として自然があり、保育者は「幼児が周囲の動植物、生命、自然環境に関心を持ち、生命を大切に、人と自然が共に生きる方法を実践するよう支援する」よう求められている。

## 4 現地視察

### 4.1 目的

以上のように、韓国では早い段階で幼児期の環境教育に該当する内容が GGE という概念の下で幼児期のナショナルカリキュラムに導入されたこと、また、少子化対策として迅速、かつ、大規模な制度改革がなされたためにヌリ課程の内容周知についても政府主導で保育現場へ様々な働きかけが行われた結果、GGE の周知も進んだと考えられる。また、上述のように韓国では GGE から ESD という概念の採用が政治体制の変更によって進められ、2019 年に改訂されたヌリ課程にも反映されているようである。一方で、大気汚染問題が日本以上に韓国の教育現場を悩ませており、屋外活動が制限されている。そこで、そうした現実のなかで、どのように保育現場がその改訂を受け止め、保育環境や実践に反映させているのかを現地視察を通して確認する。

### 4.2 調査対象・調査方法

視察対象は、韓国の Chungcheongbuk-do にある Cheongju 市及びその周辺都市にある幼児教育施設及び環境教育施設である（表 1）。視察先の選出は韓国のプロジェクトアプローチ研究及び環境教育研究の第一人者である O., Ji 博士の推薦による。

事前に予約をした上で訪問し、保育環境を観察し、施設長や主任、担当教諭から説明を受けた。記録は写真撮影及び観察内容と聞き取り内容の記述により実施し、AI 翻訳ソフトと Ji 博士を介して英語による解説及び質疑を通して実施した。Dasom Childcare Center と Aion Childcare Center の 2 園については ESD を主題とした実践に関しプレゼンテーションがあり、

表 1 対象施設

種別	施設名	訪問日	その他
保育所	Government Complex Daejeon (city) Dasom Childcare Center	2023/08/30	Workplace childcare center
	Mipyung Childcare Center	2023/08/31	Social Welfare Corporation Childcare Center
	Simtaek - Bokdae Childcare Center	2023/08/31	Bokdae Church
	Government Complex Sejong (city) Aion Childcare Center	2023/09/04	Workplace childcare center
幼稚園	Dongnam public Kindergarten	2023/09/05	Cheongju Office of Education
環境教育施設	Cheongju International Eco Complex	2023/09/02	Cheongju city entrusted the operation to the Pulkum Envi-ronmental Foundation.
	Environmental Education Center	2023/09/02	Chungcheongbuk-do Office of Education

Mipyung Childcare Center では ESD アワードに関する資料が配布された。

施設環境については、一般的な状況を概観した上で、環境教育の観点から屋内環境の状況、屋外環境の状況を観察した。実践を直接観察する機会はなかったが、屋内・屋外環境で見受けられた掲示物や作品、あるいは、解説された内容、担当者への質疑等で回答された内容から間接的に実践内容についての情報を得た。

### 4.3 結果

#### 4.3.1 保育所

Dasom Childcare Center と Aion Childcare Center は、中央省庁や地方自治体の官庁舎コンプレックスにあり、そこで働く公務員を保護者とする子どもが通園している保育所である。Daejeon 市にある Dasom Childcare Center は、園児数が約 200 人であり、園庭には菜園や鳥小屋が設置されており、主に 4 歳児がサツマイモなどの栽培やニワトリの世話をしている。3 歳～5 歳児を対象に、牛乳パックを回収し、企業へ一定量を持ち込むことで新しいトイレトペーパーに交換する、使用済みのプラスチックを種別分類して回収し、人形などの製作に再活用して保護者などに購入してもらうといったリサイクルに関する環境教育が実践されている。この環境教育は 7 名の教員が主に担当し、月に一度の研修やミーティングを行い、教職員間でアイデアや情報共有を行っている。保育室内はコーナー遊びの環境が整備されており、再利用した材料で作った製作物や自然環境に対する子ども直筆のメッセージが掲示されていた（図 1）。親子で作った製作物の展示や子どもがリサイクル材料を用いて製作した物の購入などの取り組みがあり、保護者も環境教育に参画できる工夫がある。

行政中心複合都市である Sejong 市にある Aion Childcare Center は、定員 160 名の施設である。中央省庁の各建物を含め複合施設が整備されており、Aion Childcare Center は産業通商資源部の建物の 1 階にある。この保育所では、幼児期からの ESD として、環境的観点に焦点を当て『WWW 輝く星地球』というプロジェクトを行っている。3 つの W とは「When」、「Where」、「What」を意味しており、自然環境に対する正しい価値観を確立し、環境を保護する力を育むことを目的としている。自然環境に配慮した天然洗剤を作ったり、牛乳パックから再生紙を作り家庭や地域に配布したり、鳥の巣を見つけ保護するなどの取り組みが行われている。いずれも単発的な製作活動、あるいは、体験活動と



図 1 子どもたちのリサイクル材料を用いた製作物



図2 子どもの製作物と保護者に向けた活動記録

してなされているのではなく、子どもの発見や気づきから始まるプロジェクト活動として実践されており、例えば、鳥の巣の活動では、地域の散歩をしているときに子どもが鳥の巣を発見したことが出発点となり、その後の話し合いから、鳥がどのような場所に巣を作るのかを調べ始めた。実際に、絵本や動画などから巣がどのように作られるのかを調べ、どうしたら鳥たちが巣

を作りやすいのかを考えた結果、木が必要であることに気づき、鳥たちが枝を使いやすいように集めてみたり、鳥の巣のある木に名札をつけて地域の人たちに保護への関心を高めたり、植樹をしたりした。同様のプロジェクト型活動が様々なテーマによって繰り返され、その結果、この活動をする前と後では、幼児の環境に対する意識が変化したことをエビデンスとしても示し、保護者も子どもの変化を認めていることが説明された。園内の廊下には牛乳パック等のリサイクル材料の回収箱が設置されており、そのなかにある材料を子どもたちは自由に使用し、遊びを工夫している。各保育室の入口にはそのクラスで行われている環境教育の活動が掲示され、保護者は送迎時に子どもの活動の様子を知ることができるようになっている（図2）。また、各保育室の入口には担任が季節に応じて、リサイクル材料で作ったモビールが飾られており、教員は常に幼児期からの環境教育を意識しながら保育を行っている様子が様々なところに見て取れた。この園の実践報告をみると、リサイクルや廃材利用の製作、自然観察のように個々の活動は日本の保育現場でもよく見られる活動であるが、それがプロジェクトとして実践されていることから子どもが主体的に学び、それを次の活動につなぎ、その結果、子どもが自然環境に対して保全活動に関わっているという誇りを持ち、子どもが地域社会に対する活動に主体として参画することにつながっていることが確認できた。

Cheongju 市内にある Simtaek - Bokdae childcare Center は、市街地にあり敷地が狭いために園舎の外に園庭を確保できず、代わりに屋上に菜園と遊び場が設置されている（図3）。菜園エリアでは、サツマイモ・ニンジン・ダイコン・ハクサイが栽培されていた。ダイコンやハクサイは子どもたちとのキムチづくりに使うとのことである。また、別のエリアには草花や木々が植えられており、子どもたちはハウセンカを使ったマニキュア遊びなど植物を用いた遊びをするという。

Mipyung Childcare Center は、Cheongju 市内にある園児数 100 名の園である。各保育室には子どもたちが描いたたくさんの動物の絵が掲示されており、菜園で子どもたちが動物に出会うたびに、動物を絵に描いているという。改修したての壁はすべて無垢材でできており、木のぬ



くもりに包まれた保育室はコーナーが整っていて、2歳児～5歳児の保育室はほぼ同じ保育環境になっている（図4）。園内にはグラウンドと広い菜園があり、菜園の入口には大きなクリの木が植えられている。クリの木にいる幼虫やカエルなどの発見を子どもたちは楽しみ、木に実ったクリは園内で焼き栗にして毎年食べているとのことであった。また、このクリの木のトンネルをくぐって菜園に行くと、菜園の周囲には実のなる木がたくさん栽培されており、これらの木の実が熟すと、子どもたちは自由に食べることができる。5歳児の子どもたちが主となり、菜園ではナスビ、トウガラシ、サツマイモ、ハクサイなどが栽培されており、冬にはハクサイを用いてキムチづくりを行うとのことであった。鳥小屋もあり、子どもたちが世話をし、卵は給食などに利用している。この園のESDアワードを受賞した活動は Ji, & Stuhmcke (2014)



図3 屋上にある園庭



図4 保育室内の自然探求領域に関するコーナー

でも紹介されており、プロジェクトアプローチによる実践である<sup>40)</sup>。この園では、現在もプロジェクトアプローチによる保育が継続しており、2019年の改訂済み課程に基づきどのような保育を実践しているのかを説明する資料には、Hart (2000) の子どもの参画を示す図が示されるなど<sup>41)</sup>、子どもの権利を意識した実践がなされていることがうかがえた。

#### 4.3.2 幼稚園

Cheongju 市にある Dongnam Public Kindergarten は、園児 245 名の 3 年前に開園した新しい公立幼稚園である。4 階建ての新しい園舎は広く、最上階には PM2.5 による影響を受けることなく子どもたちが運動遊びをできるよう広いプレイルームがある。職員室には個々の保育者用のパソコンが設置され、保育者の休息ラウンジも別途設置されている。3 階は 5 歳児、2 階は 4 歳児、1 階は 3 歳児と特別支援学級と年齢別に分かれており、各階には各クラスの保育室の他に様々な教材や玩具をそろえた遊戯室、図書室が配置され、広い廊下もプレイスペースとして使えるようである。保育室内は壁面に沿ってコーナーが設置されている。さらに 3 階には様々なプログラムが設定できるバーチャル体験室や砂場で化石発掘・火山噴火などの自然現象が

バーチャル体験できる最新の遊具がある。園庭はそれほど大きくはなく、砂場や遊具が設置されている。この園はESDに取り組んでいるわけではなく、一般的な公立幼稚園とのことだったが、市の教育委員会のサポートを受けて園の主任が作成した環境に関する日を伝えるカレンダーやミミズのぬいぐるみを用いた環境教育が行われている。カレンダーは子どもの発達に沿って活用している。例えば、3歳児ではカレンダーを保育室の前に置き、子どもたちはいつでも見ることができ、5歳児はこのカレンダーに書かれている内容を理解し、カレンダーに示されているQRコードを読み取り、説明動画を見て学ぶことができるという。

### 4.3.3 環境教育施設

Cheongju International Eco Complex は、環境部の予算にて Cheongju 市により建設され、2016年に開館した。長らく環境教育実践の実績がある民間団体が指定管理者となって運営しているため、掲示や展示物、学習プログラム等は環境教育の観点からみて非常に優れた内容となっている。環境学者兼漫画家である高月紘氏の絵が多く掲示されていた。センターの3階建ての建物の1階にはマスコットであるミホシマドジョウの生態や生息する河川流域などの説明が展示されている。スタンプラリーなどで学んだ後はミホシマドジョウをモチーフにした可愛いグッズがもらえるようになっており、子ども向けに遊びながら学べる教材なども作られていた。2階は教室や図書室が設置されており、幼児から小学生の子どもたちが環境教育に関する体験活動ができる。3階には事務室や研究室がある。また、この施設は2000年まで廃棄物処理場として使われていた場所にあり、廃棄物が埋め立てられていた広大な敷地内には公園や発電設備、ビオトープ、昆虫ホテルなどもある。センターの主な活動として、平日には年間200回におよぶ幼児～児童対象の体験プログラムを、週末には親子参加のプログラムを実施し、他国の子どもの体験も受け入れている。また、子どもたちだけでなく、市内にある地域の代表者が地球温暖化について考え、節電などを各地域で取り組んでいる様子も展示されており、一般市民



図5 環境教育施設内の様子  
左：Cheongju International Eco Complex  
右：Chungbuk Environmental Education Center

対象の活動も盛んなようであった。

Cheongju 市内にある Environmental Education Center は Chungcheongbuk-do 教育庁が所管の施設である。施設は新しく、1 階には利用者が遊びながら学べる工夫が多くあり、大きな立体の地球儀に地球温暖化の状況や大気の流れなど地球規模の自然現象を投影し動画説明により学ぶことができるなど最新設備が完備されている。2 階は PM2.5、エネルギー、プラスチック問題などの環境問題が解説されており、子ども自身が自然環境にとって良いことは何かを考えながら学ぶことができる。例えば、ある料理を作る際の食材の買い物を模擬的に体験するコーナーがあり、子ども自身が材料の必要量や食材が入っている容器の状態などを選択し、環境負荷の低い条件は何かを考える機会となっている。学校園がこの施設を訪問し、様々な環境問題や環境配慮行動について体験的に学べる施設である。また、近くにある牛岩山のフィールドを利用した野外教育の指導者養成講座や市民を対象としたアウトドアプログラム、子ども対象の自然体験プログラムなども企画提供している。

## 5 環境教育の観点からみた改訂ヌリ課程後の韓国の保育

2015 年の韓国の幼稚園視察を報告した中村（2017）は「3-5 歳児ヌリ課程」（2013）下で「韓国ではテーマ設定型のプロジェクト保育とコーナー保育とを組み合わせた保育が主流」だとし、保育環境の構成が重要という観点から保育教材に焦点を当て、保育室内は領域を意識しながらコーナーが設置されていること、保育者の手作り教材が多いことを報告している<sup>42</sup>。その状況は今回視察した各園の保育環境をみても確認でき、2 歳児の保育室でもコーナーが設定されており、子どもたちが活動したプロジェクトの成果をドキュメンテーションや製作物として保育室内や共有スペースでみることができた。どの園においてもプロジェクト型活動をしている様子が見て取れ、ヌリ課程の浸透過程において、保育者主導の設定型保育から子ども中心のプロジェクト型保育へと変化してきていることが実態として確認できた。改訂ヌリ課程では、子ども中心、遊びを基礎におく保育がより強固に確認されたことから環境構成の役割がさらに重視されたと考えられ、コーナーを設置した保育室内の環境は子ども主体の活動を保障する環境として標準的なものとなっているようであった。例えば、自然探求領域を意識したコーナーでは、観葉植物の鉢や小さな栽培ポット、異なる種類の種などがはいたプラケース、小動物の飼育ケース、地球儀、恐竜や魚などのフィギュア、虫眼鏡をはじめとする観察用具などが準備されており、園により十分な広さがない保育室もあるが、それでも様々なコーナーが壁に沿って作られていた。

第 3 章において改訂ヌリ課程には環境教育や ESD 概念自体の記載や解説はないものの、持続可能な社会を形成するために必要として、具体的な内容に環境教育的内容が示されていると

解説した。ESD は環境・社会・経済という3つの柱を意識すべきとされている概念であるが、ヌリ課程には、それらが明確に示されているわけではなく、どちらかという自然環境への対応に重点が置かれている。しかし、ESD を意識したプロジェクトを実践している園の報告をみると、環境という観点に中心があるものの、市民として社会に影響を与えようとしたり、生活のなかで経済活動につながる経験をしたりと、プロジェクト型活動であるがゆえに総合的な活動に発展している印象がある。そこでは、子どもが常に意欲的に新しい知識を得ようとしたり、課題について批判的に考えたり、自分ができることを考えたり、それを家庭や地域社会に発信していこうとする姿が読み取れ、プロジェクト型活動の潜在力が感じられた。コーナーを有する環境構成、プロジェクト活動を取り入れた保育への変化は、今回の改訂でより進んだようである。環境教育に限らず、保育という観点からみても韓国の保育は未来社会の市民育成を目指して、さらに発展していく可能性がある。

今回の視察対象は環境教育の観点から優れた実践をしている園が中心であったが、第4章4.3.2で取り上げた公立幼稚園は特に環境教育に取り組んでいる園ではなかったが、管理職にESDの実践について尋ねたところ、主任が開発に関わったというESDプログラムと教材の紹介してくれたことから、環境教育やESDに取り組んでいるわけではない園の教員にとっても、ESDは既知の概念であり、教員としてどこかでESDに関する取り組みに関わったことがあるなど、日本に比べて概念理解が進んでいる印象を持った。また、公的予算によって設置されている環境教育センターは地域住民だけでなく保育施設や小学校などが環境教育を実践する際に活用でき、学校園の実践を支援する施設として機能している。日本でも公立の自然体験施設や自然地を活用した公園では運営が民間委託されて、委託先によっては環境教育が市民向けに提供されているところも多い。しかし、環境教育に特化した施設が公的予算で設置されているという点、そして、市民だけではなく学校園単位でそれらの施設を教育に活用している点などは、国として環境教育に力を入れている表れといえるのかもしれない。

そして、政府が乳幼児期からICT教育を推進するとして保育現場に積極的に補助金を出しているとのことで、仮想現実（VR）を経験できる遊具や部屋が設置されている園があった。VRは地域の博物館などでも導入されており、政府として後押ししているとのことであった。また、プロジェクト活動において子どもが何かを調べるときにもタブレットなどが使われ、情報機器を積極的に活用しているようであった。保育所においては所長室のモニターで常時監視できるようすべての保育室にカメラが設置されており、昨今の保護者対応として政府主導で導入が決まったとのことだった。ヌリ課程の導入や普及にあたっては、政府主導で様々な取り組みが進められており、急速に強力に保育現場が変化させられていく実態があるようで、政府の決定を受け入れざるを得ない保育現場側に戸惑いがあることも確かなようであった。

ここでは、Inoue（2014）が示したEfsを考えていくための4つのキー概念（critical thinking,

children's active participation, an ecological worldview, and empathy with nature) の観点から韓国の幼児期の環境教育の現況を考察してみる<sup>43)</sup>。前者2つの概念は、プロジェクト活動においても中心的なものだといえるだろう。プロジェクト活動において子どもは探究者として *critical thinking* に基づき、能動的に活動に参画していく。EFS においても子どもの参画という観点から、プロジェクト活動の潜在力は高く評価されている<sup>44)</sup>。後者二つ、*ecological worldview* と *empathy with nature* についてはどうだろうか。ヌリ課程においては共に生きるということが自然探求領域の内容において打ち出されており、その対象は人間だけではなく他の生物も含まれる。人間が本来もっている共感性を同種の人間だけではなく他の自然要素にも向けることを意味する *empathy with nature* については、ヌリ課程の下で今後保育のなかでも意識されていくのではないかと推察される。第4章 4.3.1 で紹介した鳥の巣の活動なども共に生きる他の生物に思いを馳せる活動となっており、ある生物を環境と切り離してみるのではなく、生物とその生息環境にまで子どもの気づきが進むような活動となっており、プロジェクト活動であるがゆえに、活動が発展したと考えられる。

もう一つの *ecological worldview* という観点からみた実態が、今回の現場視察を通して韓国の幼児期の環境教育の課題と考えられた点である。訪問したどの園も園庭はあるが、ある程度の広さを持つ園では、園庭も運動する場や遊具を集めた場、栽培活動をする場、果樹がある場などコーナーに分かれており、どこもゴミ一つなく、無造作に落ち葉があつたりすることもなく、畑にも雑草がほとんどなく野菜が整然と並んでいた。園庭にある自然は人間の管理下にある栽培植物だけであり、動物はニワトリなど飼育されている家畜である。つまり、生物がそこで生まれ、暮らし、世代を残していくような生物多様性のある自然の場所、生態系を学べる自然の場所は園庭にはほとんどなかった。環境教育センターで紹介されていたようなビオトープを園庭に設置するという発想はないようであった。現代の都市部に暮らす子どもにとって、園庭や校庭は安全に自然と関わる場所として機能できる唯一の場所となり得るが、視察した園の園庭は人間の存在するところには人間にとって利用価値のある自然要素しか存在を認めていないかのようであり、そうした環境で日々過ごすなかでは *ecological worldview* が形成されることは難しいであろう。そして、人間の管理下にある自然との関わりしか経験のない子どもが共に生きるのみならず対象は、あくまでも人間の暮らす環境に存在を許される生物だけとなり、こうした体験から形成される自然の見方は人間中心のものとならざるをえないであろう。園庭が整然として美しく維持されている点について理由を尋ねたところ、一つの理由として第三者評価の項目に施設に関する項目があり、そこに屋内も屋外も清潔で安全であることという基準があるからだと考えられるという (O., Ji 博士, 2024 年 1 月 19 日私信)。また、近年、保護者からのクレームが日常化しており、少しの怪我也許されないような風潮があり、園側が安全な園庭を特に意識するようになってきているとのことである。

そして、ESD に関しても、以前よりは理解が深まり、誰もが知っている概念となってきたものの、意図的に取り組もうという園は少ない印象であり、ヌリ課程の改訂が ESD や環境教育の進展に効果があったとはみなしがたいという。その理由として考えられるのは、ESD や環境教育に取り組むことが第三者評価に影響したり、園児獲得に役立ったりすることがないからではないかという。日本以上に少子化が進む韓国では保育施設の生き残りも保育の質に影響する重要な要素となっているようである。日本と比較すると、幼児教育のガイドラインに記載され、公的な支援もある韓国では幼児期の環境教育を進める背景が整っているかのように見える。実際に今回視察した園のように価値を感じて実践を継続的に進めている園があるものの、広がりという点ではまだ課題が山積しているようであった。しかし、韓国の保育に普及しつつあるプロジェクト活動が環境教育実践の方法として優れた実践を生み出していることは事実であり、先行事例として学ぶことが多いと考えられ、今後も韓国の取り組みを追跡していく予定である。

#### 謝辞

ご多忙のなか、本調査実施にご協力いただき、本稿作成に当たっても有益な情報提供と確認をして下さった Korea National University of Transportation の名誉教授 Okjong Ji 博士、そして、現地での見学を許可して下さった各施設及び関係者のみなさまに深く感謝いたしたい。本研究の一部は、JSPS 科研費（課題番号 23K11550）及び大阪大谷大学特別研究費（2023 年度）によって実施されている。

#### 【引用参考文献】

- 1) 井上美智子：幼児期からの環境教育。－持続可能な社会にむけて環境観を育てる，昭和堂，2012。
- 2) Davis, J. & Elliott, S. (Eds.) : Research in Early Childhood Education for Sustainability: International Perspectives and Provocations, Routledge, 2014.
- 3) 井上美智子：幼児期における持続可能性のための教育に関わる概念理解と実践の実施実態，乳幼児教育学研究，25，pp.23-34，2016。
- 4) Inoue, M., O’Gorman, L., Davis, J. & Ji, O. An International Comparison of Early Childhood Educators’ Understandings and Practices in Education for Sustainability in Japan, Australia, and Korea. International Journal of Early Childhood vol-ume 49, 353–373 (2017). <https://doi.org/10.1007/s13158-017-0205-5>
- 5) 相馬直子：出発点の不平等と少子化のはざままで－子育ての社会化をめぐるジレンマ，『世界の幼児教育・保育改革と学力』（泉千勢・一見真理子・汐見稔幸 編著），明石書店、186-213，2008。
- 6) 一見真理子：ECEC の一層の進展目指し努力－韓国、台湾の乳幼児期教育と保育の現況を見る－，内外教育，598：2-3，2010。
- 7) 裴海善：韓国の保育政策と保育所利用実態，筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要，9：165-177，2014。
- 8) 裴海善，前掲 7)
- 9) 裴海善，前掲 7)
- 10) 山田千明：主題活動による生活に根ざした就学前教育，『アジアの就学前教育－幼児教育の制度・カリキュラム・実践』（池田充裕・山田千明 編著），明石書店，10-33，2006。
- 11) World Bank, Fertility rate, total, <https://data.worldbank.org/indicator/SP.DYN.TFRT.IN> (2023/05/19 閲覧)

- 12) 金勝権：韓国における少子化の現状と課題，『韓国の引く・幼児教育と子育て支援の動向と課題』（勅使千鶴 編著），新読書社，2008.
- 13) 張京姫：韓国における民間保育施設の現状と課題，社会福祉学研究（日本福祉大学大学院社会福祉学研究科），6：21-31，2011.
- 14) 勅使千鶴：韓国における保育・幼児教育の公共性および質の向上への取り組み—「満5歳共通課程」導入の推進計画をめぐって—，日本福祉大学子ども発達学論集，4，27-46，2012.
- 15) 裴海善，前掲7)
- 16) 裴海善，前掲7)
- 17) 張京姫，前掲13)
- 18) 一見真理子，前掲6)
- 19) 勅使千鶴：韓国の保育・幼児教育の「質の向上」への取り組み，保育の友，8，23-24，2011.
- 20) 裴海善，前掲7)
- 21) 李基淑：韓国での養育格差，『世界の子育て格差』（内田伸子 浜野隆 編著），金子書房，2012.
- 22) 裴海善，前掲7)
- 23) 新井美保子・丹羽孝・矢藤誠慈郎・渡邊眞依子・韓在熙・永井靖人，韓国の「幼児教育発展基本計画」に関する研究，愛知教育大学教職キャリアセンター紀要，4，25-32，2019.
- 24) 杉本均：就学前教育・保育改革の比較教育的考。（2）無償化とアクセスの問題，佛教大学教育学部学会紀要，22，149-162，2022.
- 25) 蘇珍伊：韓国における無償保育政策の展開と課題，現代教育学部紀要，12，27-40，2020.
- 26) 金炫勇・矢野下美智子・權成妍：韓国の保育政策に対するオリニジップ園長の意識，広島文化学園短期大学紀要，48，33-47，2015.
- 27) 新井美保子・丹羽孝，・矢藤誠慈郎・韓在熙：遊び中心幼児教育課程に関する日韓比較研究，愛知教育大学教職キャリアセンター紀要，6，9-18，2021.
- 28) Jin, X., Kim, E. & Kim, Kc. : Transforming Early Childhood Education: the Nuri Curriculum Reform in South Korea. J Knowl Econ, 2023. <https://doi.org/10.1007/s13132-023-01586-1>
- 29) 杉本均：就学前教育・保育改革の比較教育的考。（1）ガバナンス一元化の問題，佛教大学教育学部学会紀要，21，117-128，2021.
- 30) 呉地初美：韓国の就学前教育・保育における教育課程の一元化に関する考察—幼保の教育課程の変遷と「ヌリ課程」を中心に，早稲田大学大学院教育学研究科紀要（別冊 / 早稲田大学大学院教育学研究 編），22，11-21，2014.
- 31) 劉眞福：就学前教育・保育に関する考察—韓国のヌリ課程と幼児教育振興院の機能から，プール学院大学研究紀要，56，277-289，2015.
- 32) 清水陽子・石川ますみ・古野愛子：日韓における保育カリキュラムの現状と課題—「保育所保育指針」の領域「環境」・「表現」と韓国「標準保育課程」の「自然探究」・「芸術経験」の比較を中心に—，人間科学，（0），46-53，2020.
- 33) Ji, O. & Stuhmcke, S. : The Project Approach in early childhood education for sustainability Exemplars from Korea and Australia, In Research in Early Childhood Education for Sustainability: International Perspectives and Provocations (Davis, J. & Elliott, S. (Eds.)), Routledge, 2014.
- 34) 新井美保子ら，前掲23)
- 35) Elliott, E., Årlemalm-Hagsér, E., Ji, O., Wang, W. & Mackey, G.: Synopsis: An Up-date on Countries Previously Represented in the First Volume (Australia, Japan, South Korea, New Zealand, Norway, Sweden, United Kingdom, plus China) In: Researching Early Childhood Education for Sustainability: Challenging Assumptions and Orthodoxies (Elliott, S., Årlemalm-Hagsér, E., & Davis, J. (Eds.)). Routledge. 2020.

<https://doi.org/10.4324/9780429446764>.

- 36) Elliott, E. et al., 前掲 35)
- 37) 新井美保子ら, 前掲 23)
- 38) Elliott, E. et al., 前掲 35)
- 39) 大韓民国教育省：2019 改訂ヌリ 課程解説書, 2019. [https://i-nuri.go.kr/main/board/view.do?menu\\_idx=177&manage\\_idx=69&board\\_idx=374&old\\_menu\\_idx=0&old\\_manage\\_idx=0&old\\_board\\_idx=0&group\\_depth=0&parent\\_idx=0&group\\_idx=0&entire\\_check=entire&entire\\_idx=69&how\\_show=each&ismodal\\_yn=N&search\\_type=title&search\\_text=&viewPage=1](https://i-nuri.go.kr/main/board/view.do?menu_idx=177&manage_idx=69&board_idx=374&old_menu_idx=0&old_manage_idx=0&old_board_idx=0&group_depth=0&parent_idx=0&group_idx=0&entire_check=entire&entire_idx=69&how_show=each&ismodal_yn=N&search_type=title&search_text=&viewPage=1)
- 40) Ji, O. & Stuhmcke, S., 前掲 33)
- 41) Hart, R.: 子どもの参画 コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際 (木下勇・田中治彦・南博文／訳・監修). 芳文社. 2000.
- 42) 中村智子：韓国の保育教材の特性と工夫, 九州女子大学紀要, 5. (2), 61-73, 2017.
- 43) Inoue, M. : Perspectives on early childhood environmental education in japan: Re-thinking for building a sustainable Society. In J. Davis & S. Elliott (Eds.), Research in early childhood education for sustainability: International perspectives and provocations (pp. 79–96). Oxon:Routledge. 2014.
- 44) Ji, O. & Stuhmcke, S., 前掲 33)